審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　松井　健太

本論文は、1950 年代から 1973 年頃までを対象とする戦後イタリアの建築文化に関する研究である。この主題を論じるために、本研究では、この時期のイタリアを代表する建築家アルド・ロッシを中心的な研究対象とした。その上で、彼の建築・都市に関する研究や教育の側面に焦点を当てながら、ロッシの建築作品ではなく建築思想そのものを詳細に論じていくことで、それを戦後イタリアの文脈のなかに位置付けると同時に、その背景にあった戦後イタリアにおける建築・都市に対する問題意識がいかなるものであったのかを明らかにしようとしたものである。

本論は「序」、「第 1 部」（第１章から第４章まで）、「第２部」（第５章から第９章まで）、「第３部」（第 10 章から第 15 章まで）および「結論」から構成される大部の博士論文である。以下、各章の内容を概観する。

「序」では、「出来事を超える建築」という本論文のタイトルにもなっている観点によって、本研究が何を論じようとしているかについての論述からはじまり、アルド・ロッシに関する先行研究の丁寧なレビューが続く。ロッシに関する既往研究では、特に 1970 年代後半以降の主に英語圏におけるポスト・モダニズムの文脈による需要と、ロッシ没後の 2000 年代以降の主としてイタリア語圏における研究の発展の 2 つのフェーズがあったことが、丁寧にあぶり出された。それに対して本研究は、近年のイタリア語圏の研究に刺激を受けつつ、イタリア語話者にとっては自明であるが故にあまり論じられることのない、ロッシが用いた言葉の意味のひとつひとつを掘り下げるようにして、ロッシが真実何を意図していたのかを明らかにしようとした言説研究といえる。

「第１部　建築の継承という問題系の成立」は、「第１章　戦後イタリア建築文化における伝統論争」「第 2 章　新古典主義建築：伝統と革命」「第３章　近代建築運動の多元性」「第４章　伝統と技術の統合：建築の継承」の全４章から構成される。第１部では、主として 1950 年代が扱われ、戦前にはじまるモダニズムの近代建築運動に対する反動あるいは再考という側面を強く見せながら、

歴史や伝統に関する議論が盛んに行われたことを丁寧に明らかにした。第１章では、ロッシを含む当時学生だった世代と、近代建築運動世代との間で交わされた伝統論争について論じられた。第２章では、第１章の伝統論争の数年後に、ロッシ自身が取り組んだ新古典主義建築研究について検討され、伝統概念と革命概念の結びつきについて論じられる。第３章では、ロッシを中心とする若い世代が伝統論争に参加したことにより、近代建築運動そのものが多様化していったこと、そこに後にロッシにとって重要な概念となった「傾向」という概念が位置付いたことが明らかにされた。第４章では、ロッシによる未公刊論考「どのような伝統か？」を主要な一次資料として、そこで伝統と技術という２つの概念が、建築文化の継承という観点と結びついていったことが明らかにされた。

「第２部　継承のモデルとしての都市」は、「第５章　“新次元”の時代における都市像の変化」「第６章　都市の中の施設」「第７章　都市の中の住宅」「第８章　ヴェネツィア建築大学 ”建物の配列的特徴” 講座」「第９章　『都市の建築』の構造と複雑性」の全５章から構成される。第 2 部では 1960 年代イタリアにおける都市論争を中心として、1966 年に出版されたロッシの『都市の建築』で集大成されるロッシの都市論に関して、その背景とともに詳細に論じられた。第 5 章では当時のイタリアにおいて「新次元」の都市という考え方をもとに、都市に対する態度の変化があったことが指摘されている。第 6 章の「施設」、第 7 章の「住宅」は対になる章であり、都市を構成するこれら２つの要素に対するロッシの言説が検討された。第 8 章では『都市の建築』の執筆の背景となったヴェネツィア建築大学「建物の配列的特徴」講座におけるロッシの教育活動について詳細に論じられた。以上の議論の結論的な位置づけになるのが第 9 章であり、ここでは『都市の建築』の再読と再検討が試みられた。

「第３部　建築術の継承としての学校教育」では、ロッシの『都市の建築』出版以降の教育活動がとりあげられ、「第 10 章　ミラノ工科大学における建築教育と傾向グループ」「第 11 章　建築設計の教育と理論」「第 12 章　“1968 年”における建築と政治」「第 13 章　戦後イタリアという文脈からの離反」「第 14 章　スイス・チューリッヒ工科大学での教育活動」「第 15 章　第 15 回トリエンナーレ展示”建築 – 都市” (1973)」の全 6 章から構成される。第 10 章では 1966 年にロッシが着任したミラノ工科大学建築学部での教育におけるロッシの役割について、第 11 章ではそこで教育されたロッシの設計理論がいかなるものだったのかについて、詳述された。第 12 章は「1968 年」という特異な時代状況のなかで、学問と政治的理念についての議論が展開された。ロッシのイタリアでの建築教育からの追放およびその後の活動について論じられたのが第 13 章から第 15 章である。第 13 章では 1971 年の追放に至るまでの経緯、第 14 章ではその後のスイス・チューリッヒ工科大学での教育、第 15 章では 1973 年の第 15

回ミラノ・トリエンナーレでの展示について、とくにそこでのロッシの教え子たちが果たした役割について詳述された。

「結章」では、本論の各章で論じられたことの整理に加えて、「出来事を超える建築」あるいは「建築文化の継承」というロッシの一貫した主張が意味していたことについて、３つの特徴という観点から改めて論じられた。

以上のように本論は、アルド・ロッシの言説を中心に、戦後イタリアにおける都市と建築に関する議論を、理論的な観点から驚くほど詳細に論じたものである。本論の中でも指摘されているように、アルド・ロッシは 20 世紀の主要な建築家であると同時に重要な建築理論家であったにもかかわらず、特にその理論的側面についてはポストモダニズムの時代にロッシの意図とは大きく異なるかたちで、英語圏で受容され定着したという経緯があった。本論は、それを戦後のイタリアにおける都市と建築に関する議論の背景のなかに丁寧に位置付け直した渾身の研究といえる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上